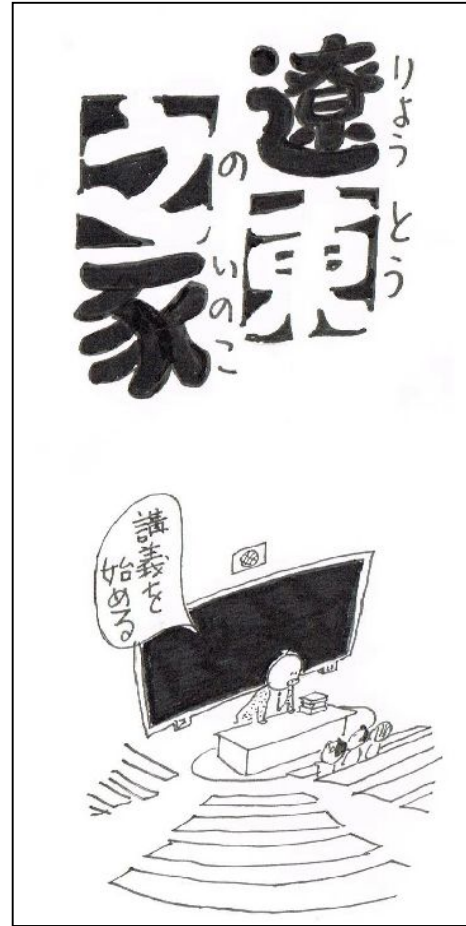


政法大学文学部、貞土引志教授の講義は名のとおり程度が低い。今日も大講堂に集まった聴講生は3人。講堂はガラガラ。それでも時間どおり講義は始まった。

「今日はあるドジな男の話しよう」  
 「先生自身の話ですか？」  
 「私語は慎みなさい」  
 「ある男が一匹のブタを手に入れた」  
 「ブタと言いますと、あの腐ってもブタのブタですか？」  
 「腐っても鯛」  
 「ブタに新宿のブタですか？」  
 「真珠」  
 「ブタの目にも涙の？」  
 「鬼。いつまでつづけるんだ。先生の話を聞きなさい。ある男がブタを手に入れた。その男は・・・」

# 先週の回答



「つて、どこの男ですか？北千住ですか、南青山ですか、それとも札幌あたりですか？」

「どこの男かは話の本筋と関係ないから省略する。むかし、遼東、現在の中国の遼東省に住む男が・・・」

「やっぱりどこに住んでるか関係あるじゃないですか、先生」

「遼東に住む」

「ドジな男が、白頭の豚が生まれたので、珍しいものだと思て」

「・・・」

「朝廷に献上しようとしたんでしょう？」

「・・・」

「つまり、その男は見聞が狭いために、世の中ありふれていることも知らずに、自分だけ得意になっている愚か者だと

いうたとえになった」

「・・・」

「で、ひとりよがりの人間のことをたとえて『遠東之家（りょうとうのいのこ）』というんでしょう？家（いのこ）はブタのことですよ、先生」

「・・・ブ」

「この話は誰も知らないと思って、自慢しようとして来た先生こそ遠東之家じゃないんでしょうか？」

「・・・今日の講義はこれまで」ブーと鼻を鳴らして教授は退室していった。



